



対人地雷対策を担う国連部門トップを務める

おがわ かずみ
小川 和美 さん

ドローンやAI（人工知能）が戦争を変えた。対人地雷は時代遅れなのか。「その逆です」と首を振る。ウクライナの戦場では3Dプリンター製の地雷が登場。ドローンが地雷を投下する。「毎月約50万個の爆発物が投下されていると聞きます。爆発しなかったものは何世代も残る」

今年、対人地雷や不発弾の除去、被害者支援などを担う国連地雷対策サービス部（UNMAS）のトップに就いた。除去にもAIが力を貸す。衛星画像を分析して危険地域を絞り込む。それでも最後は人の手作業だ。

京都市生まれ。ハワイで育った。平和な島でテレビに映る紛争を見て、「問題を解決する側の一員になりたい」と国連を志した。30年間、旧ユーゴスラビアやアフリカ各地の紛争地を歩いてきた。忘れられない光景がある。アフリカ・エリトリアの紛争地で牛が地雷を踏んだ。10分ほど苦しみ、鳴き続けて息絶えた。「戦争が終わっても、兵器の恐ろしさは残る」。その思いが今も原点だ。

気がかりなのは、ウクライナやガザに世界の目が向く一方、アフガニスタンやイラクなどで戦後も地雷に苦しむ人々が忘れられていること。ハワイでも大戦中の不発弾が今なお見つかる。

「戦争がないことが必ずしも平和ではありません」。地雷を恐れることなく故郷へ帰り、暮らしを取り戻すことができる。そんな未来を守る仕事だと信じる。

文・写真 沢村 亘

掲載：朝日新聞 2026年8月17日（承諾番号：26-1935）

*朝日新聞社に無断で転載することを禁じます